談 話 室

私の日米比較論

大 橋 善 久
住友金属工業(株)総合研究開発センター

私は 1990 年 6 月から約 1 年間社費により米国スタンフォード大学で研修を行った．大学ではクリープ理論や超塑性の分野で著名な Materials Science and Engineering の Sherby 教授の下で超高炭素鋼（UHCS）と黄銅による積層材料の研究を行ってきた．大学の様子や教授を含め多数の友人との心暖まる親交など語りたいことはたくさんあるが，ここでは約一年間の米国滞在を通じて感じ考えた日本と米国との相違について私なりの意見をぜひ書きたいと思う．もちろん短期間の滞在であり，しかも広い米国の中でも居を構えたのはカリフォルニア州のスタンフォード近辺で，さらに大学といっても訪問研究者（Visiting Scientist）という部外者でしかなかった．したがって米国の社会にどっぷりとつかったわけではないが，いずれにせよ春夏秋冬を通じて米国で生活してきた者として意見を述べてみたい．

日米の相違を語るにあたり，まず始めに特筆すべきは自然についてであろう．米国の自然は雄大であり，かつ身近に親しめる．昨年で創立 100 周年を迎えたヨセミテ国立公園（偶然にもスタンフォード大学も昨年は創立 100 周年であった．）を始め，グランドキャニオン，ロッキー，イエローストーン，ナイアガラなど自然の規模はいかにも米国的である．またこれらの自然公園への交通網や公園設備などは十分に整備がなされていて，これほど世界的に有名な観光名所であっても混雑は少なくゆっくりと自然が楽しめる．もちろんこういった観光地以外にも身近なところに自然はいくらでもある．広いから当然目的地までの道のりは遠くなるが，混雑がないから日本のように疲労感はない．休暇が日本よりも自由にとれるから，いつでも行ける．したがって時期が集中して混雑することもない．このように米国の自然は身近に親しむことができるのである．

次に社会基盤（インフラストラクチャー）について述べたい．東京や大阪などの大都市を見て外国からの訪問者はやはり GNP が世界第 2 位の国に来たと思うかも知れない．しかし東京の周辺部や地方都市を訪れて驚くのではないか．公衆便所に入ってしゃがんだとするとますます日本がわからなくなって頭を抱えるのではないか．世界最強の経済力に見合った日本の映像を撮ろうとすれば一体どこを映せばいいのだろう．

米国滞在中に何度も利用したゴールデンゲートブリッジ（金門橋）は片側 3 車線で通行料は南行きだけ $2 必要で米国としては高いと思うが，この橋は完成して 50 年以上もの間人々に利用されてきた．いったい 50 年前の日本になにがあったのかを考えると，今日に至るまでの米国の経済力を思い知らされる．全土に張り巡らされたフリーウェー，空港施設など交通網の充実，先ほどの公園の整備や公共施設の完備など社会基盤の充実度の点では，日本は米国の足元にも及ばない．

第 3 には物価の安さであろう．異常ともいえる医療費と一部の教育費そして写真用フィルムは米国の方が高い．しかしそれ以外は完全に日本のほうが負けである．価格と品質の両立は当然むずかしく，米国で売っているものの品質はそれなりではあるが，それなりでよい日常品は多いはずである．また衣料品を中心に輸入ものが多く，スリランカ製，インドネシア製，フィリピン製など様々である．一般に Made in USA と表示されているものは品質の比較的よいものが多い．米は安くてうまく，食材は日本からの輸入品を除いて大変安い．外食には舌の肥えた日本人が許せる料理は少ないが，決して高くはない．ガソリンは安く，道路は殆んどただ，航空運賃も安く，レンタカーも安い．スーパーマーケットやディスカウントショップに行くと余りの安さについつい買い過ぎてしまう．州を越えてメールオーダーした時には州税が免除されるのはありがたく，郵便代も安い．

第 4 に仕事に対する考え方について．プロ意識という点では米国の方が進んでいると思う．彼らは自分の役割分担を重んじ，決められた時間内で報酬に応じた仕事をしている．待遇が悪いと思えば自分から進んで転職する．このため職場に対する満足度は日本よりも高いといわれている．また米国はある意味では日本以上に学歴社会ではないかと思われる．ハーバード，スタンフォード，MIT といった名前が幅を利かす．彼らはよりよい待遇を得るために有名大学を目指し，卒業のためによく勉強する．彼らのプロ意識は大学時代には既にできている．しかしながら忙しいといってサービス残業はしない．決して無理はしない．だから翌日まで疲労の残るような仕事の仕方はしない．このあたりが仕事のプロたる由縁のような気がする．仕事はあくまでもよりよい生活をするための手段に過ぎないと彼らは認識している．仕事を天職として人生と一体化して考えがちな日本人との相違であろう．

以上述べたこと以外にも種々の社会機構の相違，文化の相違，民族的相違，歴史的相違などいくらでも日米の相違点はあろうが，一年間の体験で感じ考えた以上の 4 つに共通するのは生活の質ということである．どんな見方をしてもやはり米国は日本と比較し格段に豊かで，それがゆえにゆとりのある国なのである．そしてこの豊かさは豊富な天然資源を含む広大な国土に裏付けされた豊かさである．鎖国しても半永久的にやっていける国と半

年ももたない国とでは所詮体力の点では比べものにはならないのであろう．ゆとりがあって当然なのである．コロンブスがアメリカ大陸を発見してから 400 年であるが，これだけの土地がほとんど手つかずのままの状態で発見され，200 年前に意を決してこの地に移住したのは米国人にとって実に好運なことであったと言えよう．私などうらやみの気持ちから，100 年ごとに国連が中心となって，地球の再配分をしてはどうかと冗談で思うぐらいだ．

最近日米問題に関するやり取りが盛んであるが，見ていて愚かしいと思うことが多い．例えば米国人は怠け者であると言う人がいる．確かに日本人より労働時間が短く，会社に対する思い入れが少ないとは思う．しかしこれは怠けているのではなくゆとりのある生活をしているのではないか．また数字の上から米国経済の不健全性が伝えられている．しかしそれでも体感した米国は豊かであった．極言すれば，怠けていても成り立つ国と，怠けていては成り立たない国とでは労働に対する価値感が当然違っていてもよいと思うのである．怠けたり，一生懸命に働くその姿の差を問題にするのではなく，その原因となる社会の相違を議論すべきである．マスコミが取り上げるにしてもこういった全体的な議論の中で報道をしてほしいと思うし，表面的な報道はかえって問題を大きくするだけであると思う．

やはり一年間の滞在では米国のほんの一部しかわからない．しかしながら，日本の将来を建設していく上で日米の比較を行うことは実に有益であると私は考える．猛烈な勢いで発展してきた日本が路線の見直しを迫られている今，日米比較の中に答えのいくつかが見つかるような気がする．同時に正しい日米比較を行った上で共生を意識した日米の付き合い方が見えてくるような気がする．だからより多くの人々が個人個人のレベルで日米比較を行ってほしいと思う．

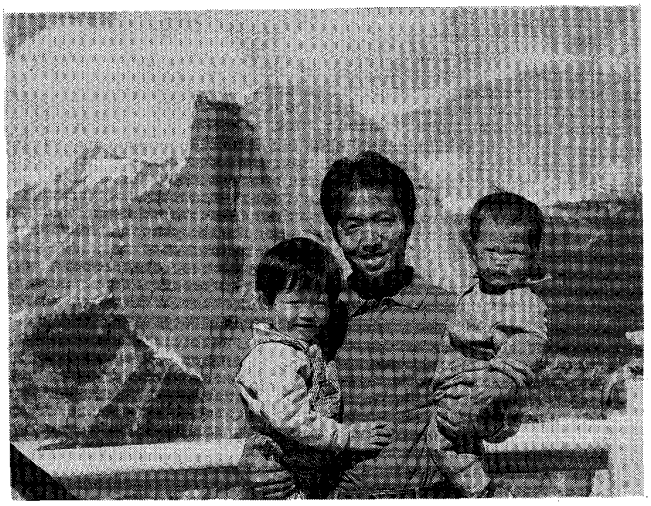

写真　創立 100 周年を迎えたヨセミテ国立公園にて

最後に本稿の日米比較においては，どちらかといえば日本の現状を批判することが多く，これに対してあえて提言はしなかった．しかし国情の違いはあるが，米国での一年間の生活を体験して，本当の豊かさがあり，より人間重視の生活をしたいという素朴な気持ちを持たざるを得ない．

鋼管部会の活動状況

パネルディスカッション「21 世紀の鋼管製造プロセスとその課題」

奈　良　好　啓
住友金属工業(株)上席専門部長

1. パネル・ディスカッションを提案

鋼管部会幹事会で私は，「次回は，将来の鋼管製造プロセスについてパネル・ディスカッションをしてはどうでしょうか」と持ちかけた．ところが，賛成する人が最初は少なかった．この提案にまともに反対する人はいなかったが，「あまり生臭い話はしない方が良いのでは」とやんわりと賛成できないむね，意見を述べる人達がいた．この人達は，「自分の会社の将来計画が裸になって，同業他社に戦略が分かってしまうことにならないか」と心配しているようであった．それに，「パネル・ディスカッションをしても，皆が本当の話をするのだろうか」と危惧しているようであった．

この提案を提出した背景には，マンネリ化した鋼管部会の立直しと将来発展の期待が込められていた．当時の鉄鋼業界は，ここ数年の減産状態から抜け出して自動車用鋼板を中心に増産するようになったのに対して，継目無鋼管部門は赤字状態を脱皮できずに苦しんでいた．当然のことながら，製造に携わる技術者は意気消沈し，部会においても積極的な態度に欠けるようになった．「ここで，何かパッとした話題を部会で取り上げては」と部会の幹事は誰もが考えているところであった．それで「生臭い話をするのではなく，匂いのしない夢を語るのはどうでしょうか」と幹事に説明したところ，「それなら一度やってみようか」と賛成者が出てきた．パネル・ディスカッションの企画はこのようにして始まったのである．

2. 討論方法を取り決め

まず最初に，幹事会はパネル・ディスカッションの討議内容について話し合った．今までに鋼管部会で企画されたパネル・ディスカッションは，部会参加の各社から部長クラスが選ばれて，自社の開発技術の紹介と他社との比較をすることが多かった．この方法は，部会参加者が最新情報の提供を受けて自己研讃をするには最も効果